授業を創る

グーグルサイトを活用した地域への情報発信

小林郁和・千葉県柏市立大津ケ丘第一小学校教諭

「自分には周囲の世界（学級、学校、地域）を変える力がある」。学習前の調査でこの設問への肯定的な回答はわずか約30％であった。設問の参考にした日本財団が2022年に実施した「18歳意識調査『国や社会に対する意識』」においても「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」という設問で日本は6カ国中の最下位であった。創造力を発揮し自信を付ける、また、地域と積極的に関わる経験が不足していることが読み取れる。

そこで、学校だけでなく地域に向けて発信することで、創造力や学習の基盤となる資質・能力に位置付けられている情報活用能力をより効果的に育むことができると考えた。情報活用能力の育成については、探究的な学習過程に関連付けた情報活用能力育成のための授業指標である、日本教育情報化振興会「情報活用能力ベーシック」に基づき次節に示す五つのプロセスで学習を進めた。

サイトの制作過程

①「課題の設定」：5、6年生児童が地域の協力者25人をゲストティーチャーとして招き、インタビューを実施した。収集した情報を学年で整理・分析し、「地域内の交流が少ない」という課題が明確になった。交流を深める手だてとして、5年生は「林間学校での情報発信経験」を生かし、「ウェブサイトによる情報発信」を提案した。これに基づき、「大津ケ丘アクティブ大作戦！」と題し、「地域を知ってもらい、地域内の交流を深められるウェブサイト制作」を課題に設定し、商店街、ひまわりプラザ（公共施設）、農家の3チームに分かれてそれぞれのウェブサイトを制作することに決定した。

ツールについては1人1台端末の活用や協働学習に適したグーグルサイトを採用することとした。なお、6年生は本校の伝統行事である校舎へのプロジェクションマッピングを通じて地域の方々との交流を深める課題を設定した。

②情報の収集：収集すべき情報を整理し計画を立て、コンテンツとなる商店街、ひまわりプラザ、農家を対象に詳細な取材を行い、情報を収集した。

③整理・分析：収集した情報をもとに、サイトマップやページごとのレイアウトを作成し、ウェブサイト制作の学習計画を立てた。

④まとめ・表現：チームでウェブサイトを仮完成させることを目標に、各チームから個人に到るまでの学習を原則自由進度として取り組んだ。また、ウェブサイトを通じて地域の魅力を発信し、店舗やイベントへの来客を促す活動を主軸に据えつつ、ウェブサイト以外の手段で地域交流を深める取り組みも行われた。その一環として「商店街での農作物販売」や「ひまわりプラザまつりでの研究発表」などの活動が展開された。

⑤振り返り・改善：仮完成したウェブサイトを外部協力者約50人からの助言を基に修正・改善し、一般に公開した。このウェブサイトは本校ホームページのリンクから閲覧可能である。

情報発信の可能性

学習後の調査では、情報活用能力に関する設問22問中20問で有意な向上が認められた。また、「自分には周囲の世界を変える力がある」と考える肯定的な回答が約85％に上昇し、地域への貢献を通じて自信を持ったことが明らかになった。地域の温かな反応が児童の創造的な自信につながった。グーグルサイトに関して、児童からは「簡単な操作性」と「共同編集の利便性」に対する肯定的な意見が多く寄せられた。これにより、ウェブサイト制作を直感的で多情報を短時間で発信できるツールとして新たに捉える視点が生まれ、従来高難度と思われていたウェブサイト制作の認識も、より身近なものへと変わる可能性がある。

この経験を踏まえ、小学生の可能性を信じ、情報発信や地域協働学習を今後も積極的に推進する。